

故郷に帰ってきたのは雨の夕べだった。

花冷えの季節だった。電車から降りる人々はみな外套を着込んで、さして広くもない停車場を傘かしげしながら歩く。線路沿いに咲く桜のはなびらがそこかしこに散って、白むような人熱れの奥に花の香りを潜ませていた。

しまった、と思う。傘がない。雨が降るとは思わなかったのだ。

この駅に売店があつたらうか、そう考えつつ待合室に足を運ぶと、誰かの置き忘れた雨傘がひとつ転がっている。なにも雨の夜に忘れなくたつて——何とはなしに手に取って、思わずぎよつとした。

『中村花音子』

傘の柄に書かれていたのは、わたしの名前だった。

すると故郷を出る前にどこかに忘れた傘が、めぐりめぐつてこの停車場にたどり着いたのだろうか。妙な偶然もあるものだと思う。駅員さんたちに傘のことを聞いてみたが、誰もそれがいつからあつたか知らなかった。

がちやり。

ため息をつきながら、ピンク電話の受話器を下ろした。

実家にかけてみたが誰も出ない。叔母は駅前に迎えを出すような気の利いた人ではないので、これは一人で帰るしかない。だが六年前には毎日通っていた道の記憶が、どうにも覚束ないのだ。わたしは育つた町から除け者にされたような心細さを感じた。

ふと、ひとつの道に思い至つた。

中学のころによく使つた登下校の近道。山間への階段をのぼり、

鎮守の森を突つ切れば家はすぐそこだ。もし途中で迷つても、電車の音をたよりに駅へと引き返せばいい。

路地に入ると懐かしい眺めが次々にあらわれた。曲がり角に咲くあけびの花と、さびの浮いた雨樋。左右に軒のせまる小道はまるで、追想を隠した迷路のよう。そう、わたしはいつも親しい誰かに手を引かれ、この道を歩いていた。あれは一体誰だったかから。

ふいに人の気配を感じて、顔を上げる。

雨傘をさした学生服の男女だった。

周囲を見ると、他にもちらほら学生服の姿が目についた。学校の帰りには時間が遅いけれど、最近の学生にはいろいろな用事があるのだらう。後ろからぱたぱたとわたしを追い抜く足音。それもやはり学生服を着た少年で、

「悪いな、遅れた」

と、前にいた一団に謝つた。

「そう辛気臭い顔をするなよ」別の少年が言つた。「これから僕ら、縁日に行くんだぜ。そう悄気ていては台なしだ」

縁日。

この辺りでそんなものがあつただらうか。

記憶にはない。この六年のあいだに出来たのかもしれない。そういえば叔母への土産を買い忘れていたが、縁日ならばそれらしい品がありそうだ。帰ると伝えていた時刻までは余裕があるし、すこし寄り道しても構わないだらう。

わたしは学生たちを追いかけて縁日へと足を向けることにした。どこまでも続く路地にささめくような笑い声。やがて行く手にある鎮守の森から、風に乗つてお神樂が聞こえてくる。

朱塗りの鳥居の向こうには、色とりどりの光が弾けていた。

不思議な光景だった。たくさんの屋台が軒を連ね、しゃぼん玉と